

俳句

わたりかんた
巨理寒太

周南市
(1895～1963)



【著 作】

句集『群鶴』（昭和39・巨理寒太句集刊行会）

【関連情報】

群鶴句会は寒太死後、発展解消し、「熊毛句会」として続いている。
巨理寒太の資料及び蔵書の一部は、山口県立大学附属郷土文学資料センターに寄贈されている。

こよなく鶴に愛着をもち、「ツルの俳人」といわれた巨理寒太は、徳山中学時代の寄宿舎で同郷の仲間、二級上に斎藤清衛（俳人・大学教授）、二級下に有馬草々子（俳人・町長）らがいて文学上の影響を受ける。この頃から短歌誌や文芸誌に投稿、入選。山頭火や白船らと白揚社の短歌回覧同人誌『四十女の戀』にも参加した。

その後京都第三高等学校英文科に入学。三高在学中に作家を志し、佐治祐吉、村松正俊、中戸川吉二ら第五次『新思潮』の同人となり、小説や詩を書いた。京都帝国大学の文学部を志望するも、岳父の反対で経済学部に入学する。

大学を出て伊賀上野の中学教師として赴任するが、生来愉快な「坊っちゃん」気質の寒太は、ここで魚釣りや舞踊に熱中する。釣りは名人に、踊りは名取となる。三年後の尾道中学教師時代に、荻原井泉水の自由律俳句を始め、当初は俳号「正彌」で『層雲』に投稿した。

昭和八年（一九三三）、尾道の寒太居に山頭火が訪れ句会を開く。寒太が自由律俳句をやっていたのは、昭和四（一九二九）～九年（一九三四）で、その後七年間句作を中止。昭和十六年（一九四一）から、『さいかち』の松野自得のもとで定型俳人として再出発する。

戦後の混乱期の昭和二十二年（一九四七）、新制八代中学校が創立され校長として迎えられるや、村に文化の灯をと「群鶴句会」を主宰して、村の青年に俳句の手ほどきをし、八代の鶴を句を通じて全国に発信し、高浜年尾や青木健作等多くの俳人を迎えた。

誰とでも親しみやすい寛容と雅量の人であった寒太は、俳句を入温と風光の文学としてとらえ、生涯を楽しく生きて来た人である。と有馬草々子は言う。寒太の俳句は伝統を重んじ中道を歩む懐古派といわれるが、新古を超越した美しいものを追求した。それが「八代の鶴」に象徴されたのである。

寒太は俳句のほかにも、「八代小唄」「八代五千石」「八代音頭」の作詞もし、八代の文化向上に寄与した。

（文・田村悌夫）



八代の鶴の墓のある古本社内の寒太句碑（周南市八代）



寒太の生家・梅鶴庵（周南市八代）

巨理寒太 年譜

（提供・田村悌夫）

12月5日、熊毛郡八代村（現・周南市）に父由男、母フジの長男として生まれる。本名正。

4月、八代小学校に入学。

4月、八代小学校を卒業し、県立徳山中学に入学、寄宿舎生活をなす。矢美鳥と号し短歌誌『アララギ』に投稿、木末葉平名で詩・散文を発表、雀糸也と号し『文章世界』や『秀才文壇』に投稿、入選する。

4月、徳山中学を卒業し、京都第三高等学校英文科に入学。八代村の生家を閉じ、一家を挙げて母・妹三人・弟一人と京都に移住す。

高水村宮川忠蔵二女シジと結婚。高校在学中に第五次『新思潮』の同人となり、小説「崇り」「賞品となる女」「出発」等を発表。

7月、三高卒業、京都帝大経済学部入学。大学時代、三木露風の『青い鳥』へ夫人名・静子で投稿。兼崎地橙孫と交遊。

京大卒業、大学院に進み文学を専攻。10月、大学院を中退し、三重県立上野中学教師に赴任。魚釣りに凝り、また踊りの名取となる。

斎藤清衛（広島文理科大教授）の紹介で広島県立尾道中学に転任。

この頃より自由律俳句を始める。
荻原井泉水主宰の『層雲』に投句（昭和9年まで）。野口雨情選の「尾道小唄」、郷里の「八代小唄」等作詞、新民謡の草分け的存在となる。

9月、尾道の寓居に種田山頭火が訪れ、四夜に渡って句会を開く。

昭和10年以來俳句を休止していたが、この年定型俳句で再出発。広島洋画家末永護の紹介で『さいかち』に投句、生涯松野自得に師事。

3月、広島県立吉田高等学校校長に転任、二十年間在任の尾道を去る。

4月、郷里の新制八代中学創立に当たり初代校長として帰郷就任。兼ねて八代青年学校長、八代図書館長、山口県社会教育委員、県立田布施農高講師となる。八代に「群鶴句会」を創設、後進の指導に当たる。
3月、八代中学校長を引退し、高水高校講師となる。
4月、八代村教育長就任。山口の『無暦』、東京の『無花果』に投句。

「八代音頭」を作詞。8月、郷土の文化財として魚切の「花笠踊」、高代の「月待踊」、河原畑の「念仏踊」の復活保存に尽力す。

八代公民館設立に尽力し、館長となる。11月23日、群鶴句会から寒太句碑建立される。

「數道を出て田の鶴と顔合はす」
秋、脳溢血にて倒れるも保養回復す。

公職一切を辞し、病氣療養に専念。

病氣保養のかたわら、下松銅飯かわせみ句会、花岡句会、熊毛句会、光さいかち句会等の指導をし、自宅梅鶴庵にて自適の生活に入る。

8月頃より気管支喘息の発作頻り、広島市民病院等で療養に努む。

11月10日退院、三丘呼鶴温泉で休養。同19日、八代に帰庵す。

11月30日、心臓麻痺にて急逝。

11月、俳人有馬草々子編纂の寒太遺稿句集『群鶴』が出版される。

昭和4～9年の自由律句100句、昭和16年～38年の定型句900句を収める。

山の尾へ年明けた日がさし鶴の声
からすもふるとこのふゆさめ
秋の潮の釣れた魚のぬくもり
亀に似て兎にも似て冬の雲
しら雲涯なし草の実はぜる
梅咲けり梅鶴庵の梅咲けり
數道を出て田の鶴と顔合はす《語注》
鶴一列また一列や初菰
鶴引きぬ八代盆地の畦の雨
白菊に黄菊めでたし弥陀の前

（句集『群鶴』抜粋
昭和39年11月15日発行
巨理寒太句集刊行会より）

《語注》表記

「顔合はす」（句碑）

「顔合す」（句集）

明治28（一八九五年）	明治35（一九〇二年）	明治42（一九〇九年）	大正3（一九一四年）	大正5（一九一六年）	大正8（一九一九年）	大正11（一九二二年）	大正14（一九二五年）	昭和4（一九二九年）	昭和6（一九三一年）	昭和8（一九三三年）	昭和16（一九四一年）	昭和21（一九四六年）	昭和22（一九四七年）	昭和26（一九五一年）	昭和28（一九五三年）	昭和29（一九五四年）	昭和30（一九五五年）	昭和31（一九五六年）	昭和33（一九五八年）	昭和36（一九六一年）	昭和37（一九六二年）	昭和38（一九六三年）	昭和39（一九六四年）
七歳	一四歳	二一歳	二四歳	二七歳	三〇歳	三四歳	三六歳	三八歳	四六歳	五一歳	五二歳	五八歳	五九歳	六〇歳	六一歳	六三歳	六六歳	六七歳	六七歳	六七歳	六七歳	六七歳	六七歳